『淮南萬畢術』拾遺（七）

有馬　卓也

10　『淮南子』（第四六集の続き）

［34］

【原文】

猩猩知往而不知來。（氾論訓）

【書き下し】

猩猩［①］は往を知るも来を知らず。

【注】

①　高誘注に従って人面獣身の獣の名としておく。狌狌に同じ。『論衡』是応は「狌狌は往を知り、乾鵲は来を知る」に作る。

【現代語訳】

ショウジョウは過去のことは知るが、未来のことは知らない。

【補】

○　高誘注に「猩猩は、北方の獣の名、人面獣身にして、黄色なり。『礼記』（曲礼上）に曰く「猩猩は能く言へども、走獣を離れず」と。人の狂走するを見れば、則ち人の姓字を知る。此れ往を知るなり。又 酒を嗜み、人 酒を以て之を搏（と）る。飲みて息むに耐へず、当に酔ふべきを知らず、以て其の身を禽（とりこ）とせらる。故に「来を知らず」と曰ふなり」とある。

○　『萬畢』（47）に「歸終知來、猩猩知往。（帰終は来を知り、猩猩は往を知る）」とある。

○　博物系である。

［35］

【原文】

乾鵲知來而不知往。（氾論訓）

【書き下し】

乾鵲［①］は来を知るも往を知らず

【注】

①　カササギ。

【現代語訳】

カササギは未来のことは知るが、過去のことは知らない。

【補】

○ 高誘注に「乾鵠は鵲なり。人 将に来事に憂喜の徵あらんとすれば、則ち鳴く。此れ来を知るなり。歳の多風なるを知り、多く木の枝に巣づくる。人皆其の卵を探る。故に「往を知らず」と曰ふなり。……」とある。

○ 『萬畢』（47）には「歸終知來、猩猩知往。（歸終は来を知り、猩猩は往を知る）」とあり、「乾鵠」を「歸終」に作る。「歸終」は注に「神獣なり」とする。

○ 博物系である。

［36］

【原文】

老槐生火。（氾論訓）

【書き下し】

老槐は火を生ず。

【現代語訳】

槐の老木が火を生じる。

【補】

○ 槐が「木＋鬼」という構造の文字によるものとすれば、ここで生じる火は鬼火（燐）に近いものと解釈すべきであろう。でなければ、とりたてて槐の老木である必要はあるまい。

○ 『萬畢』（88）に「老槐生火（老槐は火を生ず）」とある。

○ 博物系である。

［37］

【原文】

久血爲燐。（氾論訓）

【書き下し】

久血［①］は燐［②］と為る。

【注】

① 戦死した兵士の血。

② 鬼火。人魂。

【現代語訳】

戦死した兵士の血は鬼火となる。

【補】

○ 高誘注に「血精は地に在りて、暴露すること百日なれば、則ち燐と為る。遙望すれば炯炯として燃火のごときなり」と。

○ 『詩』豳風・東山の正義に本条を引き、「許慎云」として「兵死の血は鬼火と為ると謂ふ」とある。

○ 張華『博物志』雑説に「鬬戦して死亡するの地、其の人馬の血は年を積みて化して燐と為る」とある。

○ 博物系である。

［38］

【原文】

山出臬陽。（氾論訓）

【書き下し】

山は臬陽［①］を出す。

【注】

① 高誘注に従って山の精としておく。

【現代語訳】

山には梟陽が現れる。

【補】

○ 高誘注に「梟陽は山精なり。人形にして長大、面は黒色、身に毛あり、足は踵を反す。人を見て笑ふ」とある。

○ 博物系である。

［39］

【原文】

水生罔象。（氾論訓）

【書き下し】

水に罔象［①］を生じず。

【注】

① 水中の妖怪、或いは水神の名。本拾遺（四）（東洋古典学研究第44集、2017）の『得富貴方』の［2］の注②を参照されたい。

【現代語訳】

水中に罔象が現れる。

【補】

○ 高誘注に「水の精なり。『国語』（魯語下）に曰く「龍・罔象なり」とある。

○ 『国語』魯語に「木石の怪を夔蚿蛧と曰ひ、水の精を龍罔象と曰ふ」とある。

○ 博物系である。

［40］

【原文】

木生畢方。（氾論訓）

【書き下し】

木に畢方［①］を生ず。

【注】

① 鳥の姿をした木の精霊。『韓非子』十過篇・『山海経』西山経にも見える。

【現代語訳】

木の中に畢方が現れる。

【補】

○ 高誘注に「木の精なり。状は鳥の如し。青色、赤脚、一足。五穀を食はず」とある。

○ 博物系である。

［41］

【原文】

井生墳羊。（氾論訓）

【書き下し】

井に墳羊［①］を生ず。

【注】

① 土の精霊。

【現代語訳】
井戸に墳羊が現れる。
【補】
○ 高誘注に「土の精なり。魯の季子、井を穿ちて土缶を獲。其の中に羊あり。是なり」とある。また、『漢書』五行志・中之下の「視」に羊禍の記述があり、魯の定公の時に季桓子が井戸から羊のようなものが入った土製の甕を出した一件を載せている。
○ 博物系である。

［42］
【原文】
饗大高者、而彘爲上牲。（氾論訓）
【書き下し】
大高［①］を饗する者は、彘を上牲と為す。
【注】
① ここでは先祖の意に解しておく。
【現代語訳】
先祖を祀る場合は、豚を上等の犠牲とする。
【補】
○ 本文は以下に「夫れ大高を饗するに、彘を上牲と為すとは、彘の能く野獣・麋鹿より賢なるに非ざるなり。而るに神明独り之のみを饗くるは何ぞや。以為らく、彘は家人の常に畜ふ所にして、得易きの物なればなり。故に其の便なるに因りて以て之を尊ぶ」と解説する。
○ 博物系である。

［43］
【原文】
葬死人者、裘不可以蔵。（氾論訓）
【書き下し】
死人を葬る者は、裘［①］もて以て蔵すべからず。
【注】
① 皮の衣。
【現代語訳】
死者を葬る場合は、皮の衣を用いて副葬してはならない。
【補】
○ 本文は以下に「裘 以て蔵すべからずとは、能く綈綿・曼帛を具へて身に温煖なるに非ざるなり。世 以為らく、裘は得難く貴賈の物にして、後世に伝ふべく、死に益なくして、以て生を養ふに足るが故に、其の資に因りて以て之を聾む」と解説する。
○ 禁忌系である。

［44］
【原文】
相戲以刃者、太祖軵其肘。（氾論訓）
【書き下し】
相戲るるに刃を以てする者は、太祖［①］其の肘を軵す［②］。
【注】

① その家の始祖。
② 押し返す。

【現代語訳】
刃物を使って遊ぶ者は、その家の始祖がその者の肘を押し返す。

【補】
○ 本文は以下に「相戯るるに刃を以てすれば、太祖 其の肘を軸すとは、夫れ刃を以て相戯るれば、必ず過失を為し、過失して相傷つくれば、其の患必ず大なり。血を渉るの仇争・忿鬪なくして、小事を以て自ら刑戮に内(い)るるは、愚者の忌むを知らざる所なり。故に太祖に因りて以て其の心を累(おそ)れしむるなり」と解説する。
○ 呪術系である。

[45]

【原文】
枕戸隣而臥者、鬼神蹠其首。（氾論訓）

【書き下し】
戸隣［①］を枕にして臥する者は、鬼神 其の首を蹠(ふ)む。

【注】
① 戸口の敷居。

【現代語訳】
戸口の敷居を枕にして眠る者は、鬼神がその者の頭を踏みつける。

【補】
○ 本文は以下に「戸隣を枕にして臥せば、鬼神 其の首を履むとは、鬼神をして能く玄化せしめば、則ち戸牖を待たずして行き、若し虚に循ひて出入せば、則ち亦能く履むことなきなり。夫の戸牖は、風気の従りて往来する所にして、風気は陰陽の相捔なる者なり。離(あ)ふ者は必ず病む。故に鬼神に託して以て之を伸誠するなり」と解説する。
○ 『太平御覽』巻七三九・疾病部・癲に「『風俗通』に曰く「俗説に「臥するに戸の砌に枕すれば、鬼、其の頭に陥り、人をして癲を病ましむ」と」とある。
○ 禁忌系である。

[46]

【原文】
六畜生多耳目者不詳。（説山訓）

【書き下し】
六畜［①］生まれて耳目多き者は不詳［②］なり。

【注】
① 馬・牛・羊・豕・犬・鶏の六種の家畜。
② 不祥に同じ。

【現代語訳】
耳や目の多い家畜が生まれるのは不吉である。

【補】
○ 高誘注に「詳は善なり。耳目多ければ、人以て妖災と為すなり。人多言なれば而ち誠実少なきに諭ふ。之を不詳に比す」とある。
○ 予兆系である。

［47］

【原文】

病者寢席、醫之用針石、巫之用糈藉。（說山訓）

【書き下し】

病む者、席に寝ぬるに、医の針石を用い、巫の糈藉［①］を用う。

【注】

①　高誘注に従って、糈は神に供える精米、藉は神事における敷き物と解しておく。

【現代語訳】

病人が床に寝ていれば、医者は針や薬石によって治療しようとし、巫は精米や敷物を用いて（祈祷によって）治療しようとする。

【補】

○　高誘注に「寝は臥なり。席は蓐なり。医は師なり。男に在りては覡と曰ひ、女に在りては巫と曰ふ。石針の抵る所は、人の雍痤に彈し、其の悪血を出す。糈は米なり。神に享する所以なり。藉は菅茅なり。皆病を療して福祚を求むる所以なり。故に救ふこと鈞しと曰ふ」とある。

○　博物系である。

［48］

【原文】

狸頭愈鼠。（說山訓）

【書き下し】

狸頭は瘋［①］を已す。

【注】

①　鼠にかじられてできた傷。

【現代語訳】

狸の頭は鼠にかじられてできた傷をいやす。

【補】

○　高誘注に「鼠の人を齧みし瘡は、狸之を愈す」とある。

○　『太平御覽』九一二に「又（淮南子）曰く、狸頭は瘋を止む」とあり、（許慎）注に「瘋は寒熱病なり」とある。

○　『萬畢』（67）に「狸頭治鼠瘻。（狸の頭は鼠瘻を治す。）」とある。

○　医療系である。

［49］

【原文】

雞頭已瘻。（說山訓）

【書き下し】

雞頭［①］は瘻［②］を已す。

【注】

①　オニバス。

②　頸にできた腫れ物。

【現代語訳】

オニバスは首にできた腫れ物を治す。

【補】

○　高誘注に「瘻は頸の腫疾なり。雞頭は、水中芡なり。幽州は之を

雁頭と謂ふ。亦之を愈す」とある。

○ 医療系である。

［50］

【原文】

虻散積血。（說山訓）

【書き下し】

虻（あぶ）は積血［①］を散ず。

【注】

① 溜まった血液。

【現代語訳】

アブは溜まった血を（吸って）散らす。

【補】

○ 『御覽』九四三は「蟲戢 血を積む」に作る。また許慎注「蟲は血を食ふ」を引く。

○ 『說文解字』（虫部）に「蟲は人を齧る飛虫なり」とある。

○ 医療系である。

［51］

【原文】

斲木愈齵。（說山訓）

【書き下し】

斲木（たくぼく）［①］は齵（むは）を愈す。

【注】

① 削った木。『抱朴子』対俗は「啄木（キツツキ）」に作る。

【現代語訳】

削った木は虫歯を治す。

【補】

○ 医療系である。

［52］

【原文】

膏之殺鼈。（說山訓）

【書き下し】

膏（あぶら）［①］は鼈（すっぽん）を殺す［②］。

【注】

① 『萬畢』では「苓の皮」と「蝻（みみず）の脂」とする。

② 「殺」は「致」の可能性もある。

【現代語訳】

（苓の皮とミミズの）脂は、（魚や）スッポンを殺す（おびきよせる）。

【補】

○ 『萬畢』（57）に「苓皮蝻脂、魚鼈自聚。（苓皮・蝻脂は、魚鼈自（おの）ずから聚まる。）」とある。

○ 生活の知恵系である。

［53］

【原文】

鵲矢中蝟。（說山訓）

【書き下し】
鵲の矢は蝟を中す[①]。
【注】
① 高誘注に従って「殺」の意に解した。
【現代語訳】
カササギの糞はハリネズミを殺す。
【補】
○『萬畢』(69)に「鵲矢中蝟。(鵲の矢は蝟を中す。)」とある。
○ 高誘注に「中も亦殺なり」とある。
○ 博物系。あるいは皮・肉・脂が使用されていた(『本草綱目』による)ハリネズミ猟のための生活の知恵系か。

[54]
【原文】
爛灰生蠅。(說山訓)
【書き下し】
爛灰[①]は蠅を生ず。
【注】
① 腐った灰。
【現代語訳】
腐った灰がハエを生ずる。
【補】
○ 高誘注に「爛は腐なり」とある。
○ 生活の知恵系である。

[55]
【原文】
漆見蟹而不乾。(說山訓)
【書き下し】
漆は蟹を見れば而ち乾かず。
【現代語訳】
漆はカニがいると乾かない。
【補】
○ 高誘注に「乾は燥なり」とある。
○ [27]と同質。

[56]
【原文】
孕婦 見兔而子缺脣、見麋而子四目。(說山訓)
【書き下し】
孕婦 兎を見れば、子 脣缺し、麋を見れば、子 四目なり。
【現代語訳】
妊婦がウサギを見ると、生まれてくる子はミツクチであり、オオジカを見ると、四ツ目である。
【補】
○『論衡』命義篇に「妊婦 兔を食すれば、子生まれて脣を欠く」とある。

○ 禁忌系である。

[57]

【原文】

月照天下、蝕於詹蟾。（説林訓）

【書き下し】

月は天下を照らすも、詹蟾に蝕(むしば)まる。

【現代語訳】

月は世の中を照らすが、ガマガエルに食べられてしまう。

【補】

○ 高誘注に「詹諸は月中の蝦蟇なり。月を食ふ。故に詹諸に食はると曰ふ」とある。

○ 博物系である。

[58]

【原文】

鼓造辟兵、壽盡五月之望。（説林訓）

【書き下し】

鼓造[①]は兵を辟くれば、寿 五月の望[②]に尽く。（説林訓）

【注】

① 高誘注ではフクロウとし、一説としてガマガエルをあげ、そのスープが武器によって傷つけられることを回避すると解しているのであろう。ここでは【補】にあげた『文子』との関連からガマガエルと解し、スープとして飲むのではなく、兵器に塗るものと解しておく。

② 十五日。

【現代語訳】

ガマガエル（或いはガマガエルを塗った）の武器を持っていれば傷つかない。だからカエルは五月の十五日には取り尽くされてしまう。

【補】

○ 高誘注に「鼓造は蓋し梟を謂ふ。一に曰く蝦蟇。今 世人 五月の望に梟の羹を作る。亦蝦蟇の羹を作る。言ふこころは物の当に用を為すべからず」とある。

○ 『荊楚歳時記』五月五日（『歳時広記』巻二三所収）に「五月五日、俗に此の日を以て蟾蜍を取り、辟兵を為る」とある。

○ 『文子』上徳篇の徐霊府注「案ずるに『萬畢術』に「蟾蜍、五月中に之を殺し、五兵に塗れば、軍陳に入るも傷つかず」と」と関連づけて「がまを五月中に殺し兵器に塗ると、軍隊に入っても傷つくことがない」と解釈するのを採用した。

○ 呪術系である。

[59]

【原文】

華不時者、不可食也。（説林訓）

【書き下し】

華の時ならざる者は、食ふべからず。

【現代語訳】

時期はずれに咲いた花は食べてはならない。

【補】

○ 高誘注に「花は実あり。今の八九月に晩瓜を食へば、人をして瘧を病ましむるがごとし。此の類なり。故に食ふべからず。喩ふるに人の多言なるは、時に適せず。聴き用いるべからざるなり」とある。

○ 禁忌系である。

［60］

【原文】

戰兵死之鬼 憎神巫。（說林訓）

【書き下し】

兵死[①]の鬼は、神巫[②]を憎む。

【注】

① 王念孫の説に従って「戦」字を衍字とした。

② すぐれた能力を持つ巫女。

【現代語訳】

戦死した兵士の鬼はすぐれた能力を持つ巫女をいやがる。

【補】

○ 高誘注に「兵死の鬼は善く病を人に行ふ。巫能く祝して之を劾殺す。憎は畏なり」とある。

○ 呪術系である。

［61］

【原文】

蔭不祥之木、爲雷電所撲。（說林訓）

【書き下し】

不祥の木に蔭すれば、雷電の撲つ所と為る。

【現代語訳】

不祥とされる木の陰にいると、雷にうたれる。

【補】

○ 高誘注に「蔭は木景なり。撲は撃なり」とある。

○ 禁忌系である。何を以て「不祥の木」とするのかは不明。

［62］

【原文】

水蠆爲蟜。（說林訓）

【書き下し】

水蠆[①]、蟜[②]と為る。

【注】

① ヤゴ。

② トンボ。

【現代語訳】

ヤゴがトンボになる。

【補】

○ 高誘注に「水蠆 化して蟜と為る。蟜は青蜓なり」とある。

○ 変化系である。

［63］

【原文】
孑孑爲蟹。（説林訓）
【書き下し】
孑孑［①］、蟹［②］と為る。
【注】
① ボウフラ。
② カ。
【現代語訳】
ボウフラがカになる。
【補】
○ 高誘注に「孑孑は結蠆なり。水中に跂蟲に到る。読むみて廉絜」とある。
○ 変化系である。

［64］
【原文】
兎齧爲蟹。（説林訓）
【書き下し】
兎齧［①］、蟹［②］と為る。
【注】
① ウサギがかじった草。
② アブ。
【現代語訳】
ウサギがかじった草がアブになる。
【補】
○ 高誘注に「兎の噛みし所の草は、霊 其の心中に在りて、化して蟹と為る。蟹は能と読む。而して心の悪なり。一説に兎噛は虫の名なり」とある。
○ 変化系である。

［65］
【原文】
蝮蛇螫人傅以和菫則愈。（説林訓）
【書き下し】
蝮蛇［①］の人を螫（さ）すに、傅するに和菫［②］を以てすれば則ち愈ゆ。
【注】
① マムシ。
② ここではトリカブトと解しておく。
【現代語訳】
マムシが人を刺した時は、トリカブトをつければ治る。
【補】
○ 高誘注に「和菫は野葛なり。毒薬なり」とある。
○ 医療系である。

［66］
【原文】
侮人之鬼者、過社而搖其枝。（説林訓）

【書き下し】

人の鬼を侮る者は、社［①］を過ぎて其の枝を揺らす。

【注】

①　土地神を祀る祠。

【現代語訳】

他人の鬼（霊魂）を侮る者は、（土地神を祀る）社の（境内の）木の枝を揺らす。

【補】

○　高誘注に「侮は猶ほ病むのごときなり」とある。

○　禁忌系である。

［補］

【原文】

日中有踆烏［①］、而月中有蟾蜍。（精神訓）

【書き下し】

日中に踆烏あり、而して月中に蟾蜍あり。

【注】

①　高誘注に三足のカラスとある。

【現代語訳】

太陽には三足のカラスがおり、月にはガマガエルがいる。

【補】

○　高誘注に「踆は猶ほ蹲のごときなり。三足の烏を謂ふ。踆は読みて駿巍の踆」「蟾蜍は蝦蟆」とある。

○　博物系である。